



賞賛の言葉は無い— 納得のいくジャッジ 決まった時の気持ち良さ

球 児のガッツ溢れるプレーとさわやかな笑顔、流れる汗と涙。観る人の心を惹き付けてやまない高校野球。熱戦の繰り広げられるグラウンド内には、選手とは異なる目線で白球を追い、一球ごとに機敏な動作と、凛とした声を発する姿が…。それは、どんなスポーツの試合でも欠かせない存在である審判員。自身が脚光を浴びることは少ない彼らには、正しい判定と滞りない試合進行が常に求められています。昨年の夏、マリンスタージウムで行われた高校野球県大会の準決勝で、若いながら二塁審の大役を務めた越川泰広さんも、陰から野球の試合を支える一人です。

小 学3年生のとき、周囲のみんながやっても部活動は野球部で「それしか考えていなかった」と言います。しかし、高校に進学すると少林寺拳法同好会へ入会し、しばし野球から遠ざかることに…。そんな越川さんが高校野球連盟の審判部に登録したのは、高校を卒業する年の3月のこと。高校野球の審判員として長年活躍している父、孝生さんから誘われたのでした。「すぐに試合をやるうとは

思っていませんでした。「自分に子供ができて少年野球でも始めたら」という程度の気持ちで…」と笑います。ところが、その年の9月には軟式の定時制通信制高校野球大会に審判員としてデビュー。「3年間、野球をやつてなかつた影響は大きくて、ルールや動きを覚えるのに苦労しました。高校野球の独特な雰囲気にもびっくり!! スタンドから観ることはあっても、こんなに間近でプレーを見ることがなかつたから…。登録から3年ほど後には、夏の高校野球県大会で審判員を務めるようになり、現在は町の審判講習会、少年野球や中学校の大会にも声が掛かります。

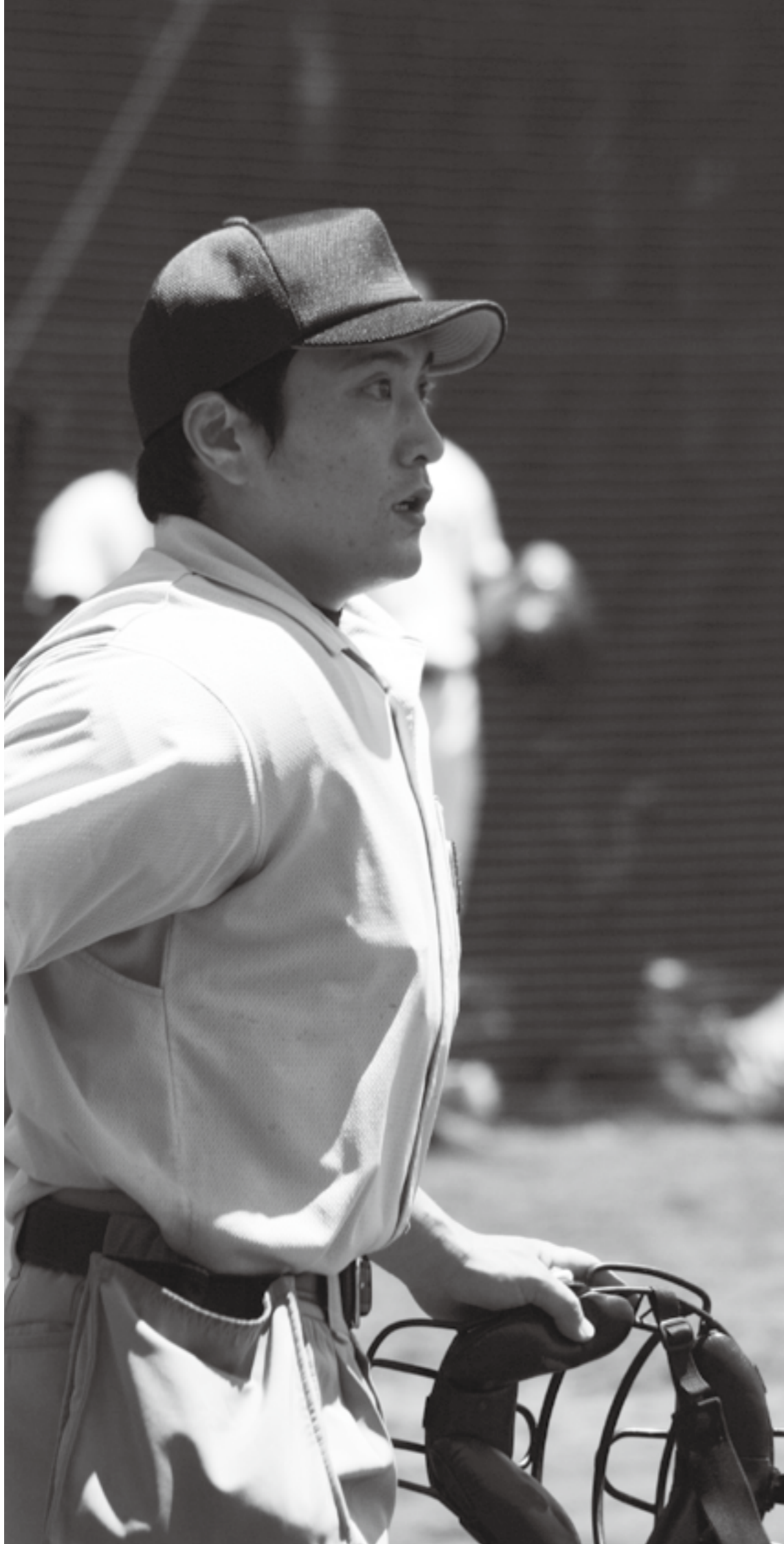
初 めのうちには試合に臨んでも特に緊張はなかつたそうですが、5、6年もやっているとなつて、この子たちはどうなつちゃうんだらう…。自分の失敗で泣く選手を見たことはありません。「最近緊張で吐き気がすることも…。試合の前日から落ち着かなくて」。好きなお酒も、選手からの信頼を失わないために、試合前夜は一切口にしないそうです。一方で「経験はどうしようもないけど、

こしかわやすひろ
越川泰広さん (30歳・十歳三)

「個人でできる競技をやってみたい!!」と高校時代に始めた『少林寺拳法』。3年のときには関東大会「3人がけ」の部で最優秀賞に。現在も週に1度、香取市内の道場へ通う。

ルールを覚えることだけは負けたくない。寝る前に「こんな場合は…」と考え出すと、ルールブックで答えを見つけるまで寝付けませなくて八〇点。ほかの審判員のミスに対する準備ができて一〇〇点」なんて言われると「層ががんばろうと…」と意地っ張りな一面を覗かせます。

選 手ばかりでなく、ほかの審判員にも信頼され、安心感を与える越川さんのジャッジ。「正確なジャッジはもちろん、それを伝えるジェスチャーをしっかりやるのが大事。そして自分のジャッジがピシッと決まると、すごく気持ちいい」。きちつとやって当たり前で誰に褒められるわけでもないけど、自分で納得いったときの快き、達成感がやりがいです。「あのアウトは決まった」とか「ストライクの手の挙げ方が良かった」とか…。とにかく最高の趣味ですね。いつか、全国大会や世界大会で審判員として一緒に試合したい!!」。抱く夢への道は狭き門。しかし、意志の強いその目には、最高の舞台で自身が審判する、最高の試合が確かに映っています。



クヌギ林は宝島のように—



真夏の太陽から逃げるように駆け込むと、そこはヒンヤリとした空気に包まれていて、玉のような汗が一気に引いていく。夏休み、小学生のほくらが毎日通う場所。そこは、限られた仲間だけが知っている秘密のクヌギ林だった。スズメバチなどの危険な敵を避けながら、狙うはもちろん、カブトムシやノコギリクワガタ。捕らえた数や大きさを競い、まるで宝物を追い求める海賊のように、夢中で林の中を駆け回っていたあの頃。いくつもの夏が過ぎ大人になった今、クヌギは根元から切られ、林の宝物も姿を消した…。